

購入文献解題

『明画全集・第6巻・唐寅（第1, 2冊）』

『明画全集・第7巻・仇英（第1, 2冊）』

『明画全集・第10巻・徐渭（第1, 2, 3冊）』

編集：浙江大学中国古代書畫研究中心

出版社：浙江大学出版社

出版年：2018年

中国の明代（1368～1644年）は、長編小説『三国志演義』『水滸伝』『西遊記』『金瓶梅』『封神演義』などを生み出した時代であったことはよく知られているが、その時代は、宋代までの伝統文化への回帰、新しい市民社会の形成や生活感あふれる「市民芸術」の開花の時代でもあった。『明画全集』は世界各地の美術館が所蔵する明代の絵画作品を網羅的に蒐集したものである。今期購入したのは、明代の画壇で名を馳せた「呉門画派」の代表的な画家—蘇州の唐寅、仇英、紹興の徐渭の作品集である。これらの作品は、14～17世紀頃の中国の美術だけでなく、当時の社会、文化、服飾、市街、建築、景観、言語などを研究するのに欠かせない貴重な資料となる。

（文責 彭国躍）

『南方徴用作家叢書 ビルマ篇』

編著者：木村一信・竹松良明編

出版社：龍溪書舎

出版年月：2010年2月

太平洋戦争開戦前夜の昭和16年11月、多くの文学者は、行き先もミッションも知らされぬまま、いわゆる白紙徴用を受けた。この時、文学者たちは、思想戦の兵士として徴用されて南方各地での文化工作に携わることになり、このミッションに関わった文学者は後に、南方徴用作家と呼ばれる。その概要について、はやくは神谷忠孝「南方徴用作家」（『北海道大学人文科学論集』1984.2）にすぐれた研究成果があり、以後、南方徴用作家が書いた南方をモチーフとした種々の文書に関する資料整備を中心に、研究が蓄積されてきた。戦前期の文学、ことにアジア・太平洋戦争期の文学を考える際には、南方徴用作家および彼らの書いたルポルタージュや見聞記、小説は、ことのほか重要な意義をもつ。というのも、こうした局面において、文学者は日本国民に対して、大東亜共栄圏の一角を成す「南方（体験）」がいかなるものかについて、具体的な情報—表象を提供することになったばかりでなく、くわえて、おそらくは、今日にまでつづく「南方」の認識地図をつくることに、少なからず関わってきたはずなのだから。

さて、全14巻からなる『南方徴用作家叢書 ビルマ篇』は、文字通り南方徴用作家としてビルマに派遣されされた文学者たちが残した文学言説の集成である。以下、各巻ごとの収録作家・タイトルを略記しておく。第1巻は高見順（一）、第2巻は高見順（二）、第3巻は高見順（三）・高田秀二、第4巻は小田嶽夫、第5巻は榊山潤（一）、第6巻は榊山潤（二）、第7巻は榊山潤（三）、第8巻は豊田三郎、第9巻は豊田三郎・北林透馬・清水幾多郎、第10巻は山本和夫、第11巻は倉島竹二郎、第12巻は岩崎榮（一）、第13巻は岩崎榮（二）、第14巻は平野零児・座談会・対談、といったラインナップである。単行本となったものでも、入手しにくいものも多いが、それ以上に細かい記事や座談会・対談までが修正されている本叢書は、貴重な文献だといえる。

（文責 松本和也）